

走湯百首の世界

犬 養 廉

はじめに

女流歌人相模には四種の家集が現存する。このうち、自撰本として最大歌数を有するものは流布本相模集である。同集は総歌数五九七首、このうち約半数を占めるのは、いわゆる「走湯百首」と呼ばれる三組の百首歌群である。この百首歌は常の百首歌と異り、特殊な情況下で詠まれた、相模↓権現↑↑相模という構造の贈答百首歌群である。この百首歌群の特殊性については、嘗て取り上げて論じたこと^①もあるが、必ずしも意を尽し得なかったところもあるし、近時、周辺部分に関して新しい研究も提出されたので、ここに改めて取り上げてみたい。以下引用の流布本相模集は浅野家本（私家集大成中古Ⅱ所収・相模集Ⅰ）により、アラビヤ数字によってその一連番号を示した。なお仮名遣の誤りも原文通りとした。

—

考察に先立ち、まず三組の走湯百首の概要に触れておく。

この走湯百首は、流布本相模集222より522に至る三百一首である。それぞれの百首は四季を初・中・季の三部に分け、以下、さいはひ・命を申す・子を願ふ・うれへをのぶ・思ひ・心のうちのあらはす・ゆめ・雑と続く、二十部各五首から成る特異なものであるが、この百首を便宜上、順次、(A)百首・(B)百首・(C)百首と呼ぶこととする。

乙侍従と呼ばれた相模が、夫大江公資に伴われて相模に下向したのは治安元年(一〇二二)、彼女の出生を正暦三年(九九二)とすれば三十歳の折のことである。かくて在国三年目すなわち万寿元年(一〇二四)正月、彼女は熱海市伊豆山の走湯権現に参詣する。(A)百首は、その途次、雨に降り籠められつれずれな折、現下の表情を百首に託し、手向けの幣で作った小さな冊子にしたため、やがて社頭の地中に埋めて奉納したものである。冒頭の詞書には次の如くある。

つねよりも思事あるおり、心にもあらであづまぢへくだりしに、かゝるついでにゆかしき所みむとて、三年といふとしの正月、箱根走湯にまうで、なに事もえまうしつくすまじうおぼえしかば、みちにやどりてあめつれなくなりしおり、心のうちに思ふことを、やがてたむけのぬさをちひさきさうしにつくりてかきつけし、百ながらみなふるめかしけれども、やがてさしはへて、けしきばかりかすむべきならねば、まことにさかしう心づきなき事おほかれど、にはかなりしかば、やしろのしたにうづませてき、精じのほどは時といふ事をぞせし

(A)百首は222より319に至るもので、「季秋」「思ひ」に各一首の欠落があり、実数は九十八首である。(B)百首は、この返歌として四月十五日、山の僧より相模のもとに届けられた権現の百首である。冒頭の詞書には、

いかでかみつけゝむ、四月十五日にかの山にあるそうのもとから、権現の御かへりとてをこせたりしかば、あさましう思かけずはづかしうこそかきつゞけたれど、うるさければとゞめつ

とあって、序歌、

320身にきけるみそぢあまりのたまづさにかざれぬればひかりをぞますに始まり、321より421に至るまでの百首である。ただし実際には「中冬」のうち一首を欠き、394と396とは重複歌、395と397とは上句が同一、393と395とは下句が同一であり、このあたりの本文には混乱が見られる。このほか(B)百首には序歌に対する跋歌として、

422たまくしげふたみながらぞまかせつるあけくれたけのすゑのよまでにを附するが、これは愁訴祈願する立場の歌で、権現詠としては相応しくない。次の(C)百首の跋歌

524ねがふことみちくることやたまくしげふたみのうらにかひもよすらむと置き換えらるべきものと考えられる。

(C)百首は、この権現返歌(B)百首に更に相模が答えたもので、(B)百首を承けて、

とありしかば、又これよりたゞならむやはとて、さてそのとし、たちのやけにしかば、かゝる事のさうしゝてかならずかゝる事なむある、けがらはしきほどにをのづからと人のいひしかば、あやしくはいなくて、のぼるべきほどちかくなりて、れいのそうにやりし、これよりもしきのやうなることあれど、さかしうにくければかゝるの詞書に始まる。次いで二首の序歌、

423たまづさにみがきそめたるひかりをばゆふしでかけしゝるしとぞ思

424うちはへてわがくりかへすたくなはをうけもひかなむよそのあま

を置いて、425より523に至るもの。「うれへをのぶ」中の一首を欠き九十九首である。なお、跋歌524が、(B)百首の跋歌422と挿し替えらるべきことは前述の如くである。

以上が三組の百首の概要であるが、その詞書から、次の五点に注目しておきたい。(A)百首の詞書から、①治安元年の彼女の東国下向が、「つねよりも思事あるおり、心にもあらで」強行されたこと、②この走湯参詣が必ずしも一途な信仰からではなく、「かゝるついでにゆかしき所みむ」という卒爾な発意であったこと、③この途次の百首が「けしきばかりかすむべきならねば……やしろのしたにうづませ」るほどに、真率な表情の吐露であったということ、(B)百首はこれより三箇月後に寄せられた権現の返歌であるが、彼女はこれに対し、④「あさましう思かけずはづかしうこそかきつゞけたれど、うるさければとどめつ」と記している。「はづかしう」「うるさければ」とあるのは、みずからの(A)百首に対する反省ではなく、権現の(B)百首に対する、そしてそれを収録する彼女の心情であろう。(C)百首は権現詠に対する彼女の再度百首であるが、⑤その詞書に、「又これよりたゞならむやは」とあるのは、権現に対する恐懼というよりも、いささか反撥めいた語気がある。このことは(C)百首の内容からも察せられる。三組の百首に如上の点を押えて先に進みたい。

二

三組の百首の内容に立ち入るに当って、先ず留意すべきはその読み方である。家集で辿る限り、われわれは(A)百首(222〜319)を読み、次いで(B)百首(320〜422)、更に(C)百首(423〜524)と読み進む。当然のことながらわれわれは、(A)百首の総体と、(B)・(C)百首の各総体とを贈―答―贈の関係で捉えることになる。だがしかし(A)(B)(C)の構成各百首は、それぞれの一首々々が順次正確に贈―答―贈の関係で対応してもいるはずである。従って、この応酬を彼女の心理の變に立ち入って吟味するためには、(A)(B)(C)の各一首ごとに、その贈答関係を検証する必要がある。換言すれば、この三

組の百首歌は、順次、百組の贈(A)↑↓答(B)↑↓贈(C)の関係に還元して捉えなおすべきであろう。

ところで、右の方法で(A)百首初春第一首↑↓(B)百首初春第一首↑↓(C)百首初春第一首↑↓(B)初春第二首↑↓(C)初春第二首……と読み進んでゆくと、必ずしもその贈答関係は正常に対応しない。殊に(B)と(C)はほぼ正常に対応するが、(A)と(B)の対応関係にはかなりな混乱がある。この事実は、(A)百首が卒爾の発意により、しかも社頭の地中に埋めて奉納したこと、従って彼女の手許に満足な草稿がなかったこと、すなわち不完全な記憶による排列・筆録によったことによる。 (B)(C)がほぼ正常に対応するのは、(B)百首が山の僧より寄せられて、まさしく彼女の手許にあったこと、その(B)百首に基いて(C)百首が詠まれた事情を物語るものである。従って、三組の百首の対応関係の復元は(B)百首を基軸として(A)百首の排列を修正することによって、ほぼ達成されよう。この対応関係の復元表は既に旧稿^①に示したが、本稿でも必要上、巻末に附載して置く。

相模を(A)百首に駆り立てた衷情は、(A)百首早春に既に明かである。

(A) 223 はるくれどたにがくれなるうぐひすも宮こにいでなかつたと思

(A) 225 つみやらぬ我ころかなこのめよりおつるなみだのしづくのみして

(A) 226 したこほりまだうちとけぬつらをばはるの山べのかぜにまかせむ

223はひたすらに都を恋うる思いであり、225は春のおとずれにも涙に昏れる現下の日常である。226は夫公資との冷えた関係であり、これを時の流れにゆだねるとする、やや自棄的な心情といえよう。こうした心情の背景は、復元された(A)(B)(C)の対応関係を辿ることによって更に鮮明に浮び上ってくる。

(A) 228 としおほくかへしきぬれどあれぬるはわが中山のふるたなりけり

(B) 327 なか山のふるたあらずことしよりわれまもりつなでおほさむ

(C) 431 すき心ひとつにすればあらをだのうちたのむべき中山かこは

(A) 228 の「わが中山」はいうまでもなく相模と公資の仲を指し、歳月を重ねて久しいが、既に荒れはててしまったとするもの。対する権現の返歌(B) 327 は、その中山を荒らさぬよう、今年よりは「われまもりつゝなでゝおほさむ」と答えたもの。(C) 431 の相模は、よその女性に「すき心」を寄せる人ゆえ、もはや頼み難いと反語表現で鋭く反撥している。公資の愛人の出現については、次の応酬からそれと知られる。

(A) 230 わかくさをこめてしめたるはるのゝにわれよりほかのすみれつますな

(B) 329 なにか思なにかなげくはるのゝにきみよりほかにすみれつませじ

(C) 433 もえまさるやけのゝのべのつぼすみれつむひとたえずありとこそきけ

当然のことながら、「われよりほかのすみれ」は公資の愛人を指す。この愛人はまた次のようにも詠まれている。

(A) 264 しらつゆのをくてもはらぬわれなれどそではそほづの心ちこそすれ

(B) 363 ころもでは山たのそほづと思ともおどろきもなきよにのみぞへむ

(C) 467 そほづをもなにならしけむ秋のたのひたおもぶきにあらぬものゆへ

(A) 264 と (B) 363 は泣き濡れた彼女の袖をめぐる応酬で、「そほづ」は文字通りの山田の案山子である。しかしながら (C) 467 の「そほづ」になると、「ならず（鳴らす・馴らす）」「ひた（引板・ひたすら）」の縁語・掛詞に縋りながらも、単なる田園風物の案山子ではなく、「案山子のような女」の意となっている。つまり、一途な思いでもないのに、なぜ、「案山子のような女」を掻き口説いたのだろう、となじったものとなっている。

当の女性が都から伴った女房か、在地の女性かは分明でないが、「つぼすみれ」「そほづ」の用語から推すと後者の可能性が強い。なお、この女性と公資の交渉を暗示するものに次の応酬がある。

(A) 248 したにのみくゆるわが身はかやり火のけぶりばかりをことゝやはみし
 (B) 349 したにのみくゆるおもひはかやり火のけぶりをよそにおもはざらなむ
 (C) 453 かやり火もふせげと思をこぞのなつけぶりのなかにたちぞさりにし

これによれば公資の夜離れは「こぞの夏」すなわち治安二年（一〇二二）に始まったものである。以上は、走湯百首から、都を恋い・子を願う相模の孤愁を、公資との関係に絞って考察したものである。次に、相模自身の男性関係に照明を当ててみたい。

三

近年の研究の成果^③によって、相模の出生は正暦三年（九九二）ごろと推定される。なお一、二年をさかのぼるかとも考えられるが、本稿では一応、正暦三年出生と見て、爾後の年齢を想定してゆく。少女時代の詳細は不明だが、彼女の作歌歴は早く、流布本相模集は「寛弘の御時ばかりにや、天王子の歌として人々よむおりがありしに、西大門」の詞書に始まる。また後拾遺集・別には「嘉言つしまになりてくだり侍けるに、人にかはりてつかはしける」として一首が見える。大江嘉言の対馬下向は能因法師集から、寛弘六年^④のことであり、十八歳の彼女は、道濟・能因らに伍す歌人嘉言に贈る歌の代作に應ずるまでになっている。代作の依頼者は不明だが、あるいは橘則長であったかもしれない。相模と則長との結婚がほぼこの頃と考えられるからである。家集に「はやうみし人のむまにてあひたるに」として112 113の贈答があり、この112は後拾遺集・雑二に「橘則長、父の陸奥守にて侍りける頃、馬に乗りてまかり過ぎ侍りけるを、男はさしも知らざりければ、またの日つかはしける」と見える。すなわち相模の「はやうみし人」は清少

納言の息則長と知られる。父則光の陸奥任国の時期は必ずしも明かではないが、小右記寛仁三年（一〇一九）七月二十五日の条から、このころ陸奥在任中だったことがわかる。後述の如く寛仁年間の相模は既に公資と結婚しており、「はやうみし」則長との結婚は寛弘末年までのことであろう。その破鏡の事情はもとより知るべくもない。ただ、則長も公資も、代作を贈った嘉言も能因の交友圏内の受領層歌人であったことは、歌人相模を考える上で注目しておくたい。

乙侍従（袋草紙）と呼ばれた頃の相模の出仕先が三条院中宮、枇杷殿妍子のもとであろうことは嘗て指摘したところだが、恐らく則長との破鏡後のその乙侍従を、強引に我が物としたのが公資であろう。相模と公資の結婚は、満田氏の考証^⑥によれば長和二、三年（一〇一三・四）のことである。穩当なところではあるが、満田氏がこの結婚を家同士によって進められた縁組とされるのはいかがであろう。走湯百首には次の応酬がある。

(A) 244 まこもぐさまよどのわたりにかりにきてのがひのこまをなつけてしかな

(B) 343 まこもぐさまことに人のかりつめばのがひのこまもなつくとしれ

(C) 447 のがひにもはなちやせましまこもぐさたなれのこまのゝどけからぬを

ここに見られる「野飼の駒」は行動の自由を保障された宮仕えの身を意味していよう。(A) 244の「淀のわたり」は「夜殿わたり」を掛けたもの。従って、強引に局に押しかけて私を我が物とした、の意となろう。(B)を介して(C)は、もう一度、自由な身にして欲しい。あなたに取りこめられた私を、の意となる。長和二、三年段階において、相模の母系慶滋家と大江家の親交^③は殊更に二人を親しくしたであろうし、その段階での二人の結びつきを相模は、満更でもなく受け入れたのかもしれない。(A) 244 (C) 447は東国在住三年目の現状に発する嘆きでもあろうが、ここに覗かれる結婚の経緯は少くとも家同士で整えられた縁組とは思われない。相模と公資との結びつきは、むしろ満田氏自身が、流布本相

模集156、159の贈答相手を藤原頼任と推定されて、そこに見られるあだめいた掛け合いを妍子後宮の雰囲氣とされる、^⑥

そのような宮仕生活中のゆくりない出会いと見るべきものであろう。

乙侍従時代の相模に大きな影を落したもう一人の男性がある。四条大納言藤原公任の息定頼である。万寿二年（一〇二五）上京後に始まる相模と定頼との恋愛は周知の如く、流布本相模集と後拾遺集を重ね合わせることによってほぼその消長が浮び上ってくる。ところで、この恋愛が万寿二年上京後に始まるか、治安元年（一〇二二）東国下向以前に芽ばえたものかは説の分かれるところである。筆者は走湯百首に見え隠れする貴公子の存在、その他から治安元年以前に始まると考えたい。流布本相模集からしばしば引用される次の部分

ながつきはつかあまり、しぐれおかしきほどのゆふぐれに、ある所にさしおかせし、としごろのきたのかたをさりてはなれるたまへりとき、しかば

83人しれずころながらやしぐるらむふけゆくあきの夜はのねざめに

いかできゝ給けむ、ひさしうありてかれより

84としへぬるしたの心やかよひけむおもひもかけぬ人の水くき

つかひゞとゝめて返事

85もりにけるいはまがくれの水くきにあさきころをくみやみるらむ

83は後拾遺集・雑二に「中納言定頼、家をはなれてひとり侍ける比、住侍けるところのこしばがきの中にをかせ侍りける」とある。定頼が北の方濟政女のもとを去って、父公任の四条邸に移ったのは、満田氏の詳細な考証^⑥があり、万寿二年八月二十四日（小右記）のことである。一方、相模の上京は同年五月上旬^⑥である。定頼と北の方との離別の風聞を耳にしたとしても、九月二十余日に早くも83の歌を「ある所にさしおか」せる措置は、いささか唐突であろう。

84の定頼の返歌に「おもひもかけぬ人の水くき」とあるのは、定頼が相模の筆跡を既に見知っていたことであり、加えて「としへぬるしたの心やかよひけむ」とあるのは、社交辞令にせよ、両者の心の交流が数年に及ぶこと、すなわち東国在住四年を越える彼方に贈答などのあったことを思わせる。

近時、これを明確に裏付けるものとして、定頼集の一首と走湯百首をめぐる森本元子氏の貴重な御指摘^⑦があった。

あけくれの心にかけてはこね山ふたとせみとせいでぞたちぬる（走湯百首(A)315）

別れてはふたとせ三とせあはざらん箱根の山のほのはるけさ（定頼集明王院本・52）

との照応である。森本氏は、相模が下向に臨んで定頼に贈った歌を、のちに百首のうちに加えたものと見、定頼集52は下向する相模に返した詠と推定、「定頼に熱い思いを寄せる女性のひとりに相模がいたこと、その相模に定頼もある程度こたえていたことは、否定できない」とされている。氏の指摘は明快であり、疑問の余地はない。

定頼の官歴を見ると、相模と公資の結婚している長和三年、十月には右中弁で妍子中宮の権亮を兼ね、寛仁元年三月には蔵人頭、同年八月には正四位下に昇叙している。この叙位は妍子中宮が定頼室の父済政邸に移御していたことの賞である。定頼は次いで翌二年十月、妍子が皇太后となるに及んでその権亮にも任じ、寛仁四年十一月参議に昇っている。かく見てくると、定頼と妍子の関係はかなり密であり、同じく妍子に仕える相模との間に交渉の生ずるのは、ごく自然なようである。多分に相模よりする一方的な憧憬ではあったろうが、定頼もほどよくこれに応じていたことは森本氏の説く如くであろう。ただ、定頼と済政女には既に経家ほか二女があり、前述の離婚問題が、万寿二年五月上京の相模と関連するとは考えられない。定頼にはより濃厚な女性問題もまた多彩である。相模の場合は、恐らく一方的な淡いあこがれであり、具体的な関係はむしろ上京後の展開であろう。

ただ、(A)百首詞書の「つねよりも思事あるおり、心にもあらであづまぢへ」下った背景に定頼のあったことはほぼ

間違ひあるまい。公資もその事情を知ればこそ、相模を強引に随伴して下向したものであろう。走湯百首中、定頼への思慕とおぼしきものは次の如くである。

- (A) 306 てにとらむと思こころはなけれどもほのみし月のかげぞこほしき
 (B) 408 みそらゆく月のかげをも身にそへて心のうちにさやけからせむ
 (C) 510 つきかげを心のうちにまつほどはうはのそらなるながめをぞする
- (A) 308 しづのおになびきながらも身にぞしむくらゐのやまのみねのまつかぜ
 (B) 410 まつかぜのいとゞみにしむものならばきみがちとせぞひさしかるべき
 (C) 512 しきなみはたちまさるともふきこなむ心のうちにまつのはかせ
- (A) 314 いくしきゝみがおもかげあらはれてさだかにつぐるゆめをみせなむ
 (B) 416 いまはたゞみにはゝなれぬかげならばゆめならずともみえざらめやは
 (C) 518 うつゝともゆめともわかず身にそへるかまぼろしをさらばたのまむ

「ほのみし月のかげ」「くらゐのやまのみねのまつかぜ」「いくしきゝみ」などは、まさしく参議左大弁定頼（治安四年現在）その人を指すものであり、「しづのお」は無論、夫公資をいう。前節では、夫の夜離れに発する相模の望郷・孤愁に触れたが、ここではそれに先立つ相模自身の問題を考えてみた。(A)百首には、子を願ひ・親を思い・都を望む衷情が切々と歌われている。しかし相模を(A)百首に駆り立てたものは、心にもあらであづま路へ下った彼女の、不如意な在国生活の中で、相乗的に増巾された定頼への思慕であり、それが(A)百首の底流となっていよう。(B)百首はこれに対する権現の慰撫であり、諭しであるが、おおむね(A)百首の詞句をなぞって空疎に流れ、説得力に乏しい。こ

れに対する(C)百首はむしろ硬化、反撥して、(A)百首の主題をかえって明確化したかに見える。以上が走湯百首の世界であるが、最後に権現詠(B)百首の作者の問題に触れて稿を結びたい。

四

(A)百首は相模自身の率直な心情表白で、人知れぬ告白として、返歌など予期せぬものであった。にもかかわらず、権現という第三者の返歌(B)百首が届いた時、これはオープンなものとなり、相模にとって、あらたな主張・釈明・宣言が必要になってきた。それが(C)百首である。従って、(A)に答えた(B)の対応の仕方によって、(C)は微妙に反応、ねつとりと絡んで(A)の再確認乃至結論として展開する。このことは、(B)百首の作者の問題とも関連して検討の必要がある。 (B)百首権現詠の作者について考えられるのはおよそ次の三人、すなわち、(1)相模自身、(2)山の僧・神官、(3)公資であろう。

先ず、(B)百首を相模自身の作と見る説には森本真奈美氏の御論^⑧がある。氏は(A)と(B)との照応関係を分析、(A)百首のひそかな奉納と(B)百首権現の返歌という奇怪なエピソードが、何の説話にも見えないことから、(B)百首を相模自身の作と推論される。すなわち、相模がみずからの寂しさを紛らすために一つの物語を仮構、それに答えてくれる人物(権現)を設定、それに答える形の(C)百首を以て、一つの世界を創出したと考えられる。魅力的な意見ではあるが、筆者には幾つかの疑義が残る。流布本相模集は冒頭の序文を始め、集内の詞書、歌の排列等に極めて物語的などころがある。このことについては、相模の、短篇小説創作に挑む姿勢を指摘された森本元子氏の御論^⑨もある。だがしかし、この走湯百首もそのような創作であろうか。素朴な疑問の一つは、(A)百首のみに集中する排列の混乱である。巻末の

附表に見る如く、(B)(C)はほぼ正常に対応するのに、(A)のみは(B)との対応関係がひどく錯雑する。しかもこれは、季春・初夏・季夏……といった部立五首内部での排列の混乱であり、百首中三十五箇所に及ぶ。(A)にのみ見られるこの混乱は書写上の問題ではあるまい。文字通り、神前の地中に埋めて奉納、後日、不完全なメモあるいは記憶によって筆録した事情による。その点からも(A)百首冒頭の詞書は虚構とは思われない。(A)百首に対する(B)百首権現詠が相模自身の手になったとすると、(B)百首は現状の流布本(A)百首とこそほぼ対応するのが自然であろう。にもかかわりず附図の如く復元しなければ対応しないのは(B)百首権現詠が、作者の手離れた、地中に埋めた(A)百首(復元(A)百首)に基づいて作成されたこと、すなわち相模以外の第三者によって作成されたことを物語っている。次に(B)百首の内容であるが、真率な(A)百首に対して必ずしも誠実に応えたものとは言い難く、多くは(A)百首の歌詞に縫って、やや安易な常識的な内容に終わっている。しかも(B)百首には一定の方向性がなく、時にはなだめすかし、時に韜晦した跡が濃い。命令(13)・使役「す」「さす」(12)・詠え「なむ」(11)などを用いて権現の立場を装ってはいるが、しばしば破綻も見せている。

(A) 225 つみやらぬ我こゝろかなこのめよりおつるなみだのしづくのみして

(B) 324 このめよりおつるしづくのつくぐとしづかにいまはわかたつませむ

(A) 226 したこほりまだうちとけぬつらゝをばはるの山べのかぜにまかせむ

(B) 325 したこほりけぬくゝならばうちとけてなにのつらゝかいまはあるべき

などは権現詠として合格であろうが、

(A) 233 あをやぎのいとうきふしのしげゝればくるしきまでぞ思みだるゝ

(B) 333 あをやぎのいとめづらしき人みればまたやくるとぞあひまたれける

(A) 246 なみだにもきえぬおもひの身をつめばさはのほたるもあらはれにけり

(B) 345 ←よのなかをてらすばかりにおもひなせなにかほたをあはれとはみし

などは対応にやや違和感がある。殊に(A) 246は和泉式部の有名な一首

物おもへば沢のほたるもわが身よりあくがれいづるたまかとぞみる(後拾遺集・雑六)

を踏まえたものであろうが、(B) 345は相模作と見るにはやや蕪雑ではあるまいか。先に引いた、

(A) 228 としおほくかへしきぬれどあれぬるはわが中山のふるたなりけり

(B) 327 ←なか山のふるたあらずことしよりわれまもりつゝなでゝおほさむ

などの(B) 327は権現の立場ではなく、公資の立場そのものを露呈していて、虚構の上にもせよ、公資を「しづの男」(A) 308と詠む相模の発想とはほど遠いものを覚える。総じて(B)百首は(A)百首より見劣りがする。これをしも相模が権現を装う技巧と見るべきであろうか。更に(C)百首の応じ方から(B)百首を考えてみよう。

(C)百首で気付くことは、激しい反撥の語気である。これは権現の慰め、約束に対しても容赦ない。権現に対する謝意は、ほとんど形式的な序跋に限られる。その序歌も、

(C) 423 たまづさにみがきそめたるひかりをばゆふしでかけしゝるしとぞ思

(C) 424 うちへてわがくりかへすたくなはとうけもひかなむよそのあまびと

など、(C) 423はそれとして、(C) 424の「よそのあまびと」の如きは権現に対する物言いではあるまい。また

(C) 425 ゆくすゑのはるかなるべきしるしにはまづとしかへるそらにかすめよ

これは

(B) 321 かすみたちいでこし時のしるしにはちとせのはるにあふとしらなむ

に対するもだが、言葉は信用できない、先ず証拠を見せてほしいとの訴えである。

(A) 278 冬のよをはねもかはさであかすらむとを山どりぞよそにかなしき

(B) 376 かぜさむみはしうちかはしいまよりはとをやまどりのひとりねさせじ

(C) 481 夜をさむみなからわぶなる山どりのおはにもふれてよそへざらなむ

(A) 292 たらちめのおやのいきたる時にこそこのこかいあるものとしらせめ

(B) 391 このかひはありぬべらなりうら事によせくるなみのかずしらぬまで

(C) 496 ひろふべきかたもなぎさにみゆるかなこをやいふらむうつせかひとは

の如く見てゆくと、(C)には権現に対する敬虔さはほとんどなく、反撥、開きなおりのみが目につく。(B)を相模作とすると、(B)を媒材とする、自作自演による感情の昂揚ということになるうか。筆者はむしろ、権現の背後にいる、権現詠の作者に対する反撥と見るのが自然なように思う。その権現詠(B)百首の作者とは山の僧・神官等も考えられるが、現下の夫大江公資を当てるのが最も相応しいのではあるまいか。外部徴証がないので、事は水掛け論になるが、山の僧・神官・国府の役人などに相模の百首歌と渡り合う歌人がいたとは、まず考えられない。また、(B)百首に見る如く、彼等が国守夫人の愛情問題に立ち入るのは、権現の立場を借りたにせよ、いささか僭越の感があるう。さらにはこの応酬には、二人の結婚の事情(A) 244 (B) 343 (C) 447など、当事者同士でしか通じないものもある。再度、引用するが、

(A) 264 しらつゆのをくではもらぬわれなれどそではそほづの心ちこそすれ

(B) 363 ころもでは山たのそほづと思ともおどろきもなきよにのみぞへむ

(C) 467 そほづをもなにならしけむ秋のたのひたおもぶきあらぬものゆへ

の如き、(A) 264 (B) 363 は単なる案山子の対応であるが、(B) 363 のそらぞらしい応酬に突如、「案山子のような女を」と反撥したのが (C) 467 である。こうした反応は背後なる公資その人にこそ投げかけたものと見るべきであろう。公資は後拾遺以下勅撰入集七首の歌人であり、彼の家の桜を賞して、能因が春ごとに上京して宿った（袋草紙）という風流好士でもある。彼が妻の百首を入手して、山の僧を介して権現の名で返歌し、口をぬぐっていたことは十分にあり得そうだし、相模はまたそれと知ったからこそ、激しく反撥したのもであろう。そして、公資と絶えた後、往時を愛惜、一時期の形見として、自撰家集に大きく位置づけたものでもあろう。確証のないまま、現在のところ筆者はそのように考えて、大方の御批判を待つものである。

注

- (1) 拙稿「相模に関する考察」上村悦子編『論叢王朝文学』笠間書院・昭和53・12、「走湯百首論」犬養廉編『古典和歌論叢』明治書院・昭和63・4
- (2) 部立は、(C)百首が四季を月次に立てるなど、各百首によって小異があるが、便宜上、(A)百首に統一した。
- (3) 満田みゆき氏「相模伝記考」——結婚まで・母系慶滋氏との関連を軸に——国文目白22・昭和58・3
- (4) 拙稿「能因法師研究」——その歌人的出発まで——『国語国文研究』30号・昭和40・3
- (5) 拙稿「相模」国文学・昭和42・12
- (6) 満田みゆき氏「相模伝記考」——大江公資・藤原定頼との関係をめぐって——『和歌文学研究』49号・昭和58・8
- (7) 森本元子氏『定頼集全釈』73頁・風間書房・平成1・3
- (8) 森本真奈美氏「相模百首について」相模国文8号・昭和56・3
- (9) 森本元子氏「相模集私見——ある二歌群に関して——」相模国文8号・昭和56・3

走湯百首の世界

附 表

季 春					中 春					初 春							部	
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	番	
237	236	235	233	234	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222		(A)	
336	335	334	333	332	331	330	329	328	327	326	325	324	323	322	321	320	(B)	
440	439	438	437	436	435	434	433	432	431	430	428	429	427	426	425	424	423	(C)

初 秋					季 夏					中 夏					初 夏			
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九
254	256	255	253	252	251	248	250	249	247	246	245	244	243	242	240	241	238	239
355	354	353	352	351	350	349	348	347	346	345	344	343	342	341	340	339	338	337
459	458	457	456	455	454	453	452	451	450	449	448	447	446	445	444	443	442	441

中 冬				初 冬				季 秋				中 秋						
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	
274	273	272	271	270	268	269	267	266	265	263	264	欠	262	261	260	258	257	259
373	欠	372	371	370	369	368	367	366	365	364	363	362	361	360	359	358	357	356
478	477	476	475	474	473	472	471	470	469	468	467	466	465	464	463	462	461	460

子を願ふ			命を申す					さひはひ					季 冬					
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九
294	292	291	290	288	289	287	286	285	282	284	283	281	280	279	277	278	276	275
392	391	390	389	388	387	386	385	384	383	382	381	380	379	378	377	376	375	374
497	496	495	494	493	492	491	490	489	488	487	486	485	484	483	482	481	480	479

ゆめ		心のうちをあらはす					思ひ					うれへをのぶ					子を願ふ		
㐁	㐂	㐃	㐄	㐅	㐆	㐇	㐈	㐉	㐊	㐋	㐌	㐍	㐎	㐏	㐐	㐑	㐒	㐓	㐔
311	310	309	308	307	306	305	304	欠	302	301	303	298	300	297	299	296	295	293	
413	412	411	410	409	408	407	406	405	404	403	402	401	400	399	398	397 395	394 396	393	
515	514	513	512	511	510	509	508	507	506	505	504	503	502	501	欠	500	499	498	

・印は排列の混乱を示す。

雑						ゆめ		
	㐁	㐃	㐅	㐇	㐉	㐈	㐊	㐌
	319	318	317	316	315	314	313	312
524	421	420	419	418	417	416	415	414
422	523	522	521	520	519	518	517	516